



文部科学省HPより引用

## 持続可能な社会の創り手を育てる

### ESD for 2030 と幼児教育の親和性について

## 恭賀新年

早いもので令和3年となりました。世界中がコロナウイルスに翻弄された昨年。この苦境を乗り越えるために、人間の智慧が繋がり合い、大きな力となりますように。誰もがそれに連なる一人として、自分の行動や意識を変える契機を持てますように。その契機が、いのちに関わる悲しみではなく、希望に溢れたものでありますように。

2021年元旦

富士中央幼稚園  
園長 小林直樹



さて、このところずっとSDGs(持続可能な開発目標)と幼児教育をどのように繋げていくかを考えている中、年末、研修の機会に恵まれ、富士市主催の講演会に出席しました。

演題は「持続可能な社会の創り手を育てる教育・保育」。静岡大学教育学部教授・田宮縁先生による、SDGsの基本説明と、幼児教育とESD(\*1)との親和性、そしてレジョ・アプローチから考える質の高い幼児教育についての講義、まさに富士中央幼稚園が大切にしてきたこと、進み行く方向と重なる内容でした。

「親和性」というと抽象的でわかりにくい言葉ですが、つまり同じ方向で考えやすい、なじみがよい、ということです。なぜでしょうか。

幼児教育が、それ以降の学校教育と一番違う点は、「環境を通して行うことを基本としている」という点です。幼児教育では遊びを通して総合的に子どもたちを育てていきます。バラバラの科目ではなく、人やモノ、見えるもの、聞こえるもの、経験したことなど、総合的な環境の中で小さな学びが互いに連動して、子どもたちのグローバルシチズンシップ(\*2)の基礎を培っていくのです。

また、私たちの社会の課題は、それぞれが個別にあるのではなく、お互いが繋がって生じています。当然その解決の道筋も個別のものではないため、本当の解決へは、遠回りをしてでも仕組み全体を改めていく必要があります。

一方は育ちの道筋、一方は問題解決への道筋ですが、どちらも個々の事柄へのアプローチではなく、仕組み・環境・全体の繋がりを考えていくという点で、両者はとても近いものになっています。これは大きな発見でした。

田宮先生が、寄付に意味がないということではなく「寄付をしてください」と子どもに呼びかけるのは教育ではない、「仕組み」を考える人・創る人を育てるのが教育だ、とおっしゃいました。幼児教育の可能性を示唆された希望あふれる言葉として受け取りました。The Art Seasonに必ず繋げていきます。 主任・小林浩子

\*1 ESD=Education for Sustainable Development (持続可能な開発のための教育) SDGs実現に向けて2019年11月ユネスコ総会で採択、同年12月国連総会承認

\*2 グローバルシチズンシップのお話と併せて紹介されたR・フルガムの著書『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』の一節を、別頁「ちゅうおうひろば」に掲載します。

An educational foundation  
Fuji Chuo Kindergarten

豊かな生活の習慣を培う

見て聞いて感じる こそ  
感じ 考えて 生み出す からだ  
生み出し 分け合い 喜び なかま